



《翔》

作品《翔》について

野口益代

1987年の年が明けてしばらくたった頃、3月に卒業する人達から、秋に完成予定の学生会館に、卒業記念品として彫刻の作品を贈りたいという相談を受けた。テーマは親和女子大学がますます発展することを希望して《翔》にしたいとの由。

それ以後、私の頭には《翔》のイメージを求めてさまざまな形が浮んでは消え、浮んでは消えていたが、決定的にこれというイメージを定着できていた。——そして数カ月——木曾に面白い木があるという。

木曾の自然を背景にしてかなり大きな材木置場で見るとその木は巨木とは言いがたいが、直径約1メートル、樹齢400年はたっているという松の木で、人間に喩えれば100歳を越えるらしい。都会の松の木はいざ知らず、木曾の美しい水と空気が松の寿命を全うさせるのだろう。そしておそらく深い深い谷間で風雪に堪えながら僅かに差す太陽を求めて真直ぐ伸びたと思われる。節もなく突に素直に伸びたその木は、根元あたりから2メートル60の長さで切断され、横たわっていた。私が制作用に出会った最大の木だった。ただあまりにも樹齢を経ているために、ほとんどの大木がそうであるように、この木も中は腐けて大アリの住家になっていた。中が詰まっていれば2トンはあるという木なのに腐けた所を掃除して、何万匹という大アリに退去してもらおうと約850キロになった。中空となって横たわっている木を起して、ぐるりを回り、近くから、遠くからこの木を眺めると、確かに興味をそそる木だった。そして決めかねていた《翔》のイメージがその木に出会ったことによって私の頭を離れ、木の中に現実のものとして見えてきた。

大らかに、自由に、踊り、躍動する女人3人、羽搏く鳥、駆ける犬、そして回灯籠と透し彫り。我ながら楽しいイメージであった。おかげで厳しい肉体労働といくつかの壁にぶちあたりながらも、何とかイメージを形にすることができた。

写真をプリントしてもらった店の主人が、ふと写真を見て「平和という題ですか」と。——私は嬉しかった。

《翔》というテーマではあるけれど、常日頃の私の心のつぶやきは、〈自由〉と〈平和〉、〈自由〉と〈平和〉であり、さらにはその向こうの《遙かなるもの》を求める心なのです。